台湾の皆様、映画の上映をとても光栄に思います。

映画『こんな夜更けにバナナかよ　愛しき実話』は、2018年の6月から、北海道で一ヶ月余の間に撮影したのですが、その年の正月、ずっと行きたかった台湾に伺いました。

数年前、旅行に行く直前に急に行く事ができなくなり、それから数年もの時間を経て、映画の本格的な準備が始まる前に！と、台湾に行ったのでした。

正月に台湾から日本に戻ってからは、１日も休む事なく映画の準備をしました。

念願だった台湾旅行でリフレッシュできた時間が、映画に好影響を与えたのは間違いありません。

この映画の主人公・鹿野靖明は、ヒーローでも、救世主でも、革命家でも、

活動家でもありません、市井の人です。しかし、24時間介助なしでは生きていけない状況の中、自分の人生を愛し、周りの人々と真剣に向き合い、故にぶつかりつつも、決して人との関わりを諦めない、生きるのを諦めませんでした。

その、「自分の人生を生きた」結果、その生き方は、社会に対するメッセージとなり、日本の福祉を変えようとする運動そのものでした。

世界は大きな流れの中、多様性とマイノリティが危機に瀕しています。

このような時代にこそ、必要とされている物語であり、社会を変える出発点となるのではないか。より多くの人々が、小さな声でも、小さな一歩でも、小さくとも拳を掲げることが、社会の歪みを正していくことにつながるのではないか、と思っています。

この映画は、多いに笑い、多いに泣いて、楽しんでもらえるエンタテイメント映画です。そして、なおかつ、社会の障壁や差別をぶち壊す「挑戦状」であり、全ての人に「エール」をおくる、生きる力にあふれた希望の映画でもあります。

一人でも多くの人にこの映画を観て欲しい。マイノリティの人たちと自分たちについて考えて欲しい。映画を観た後、ふっと何かを考えたり、口にする、そんな人が一人でも増えて欲しい。

職場や家庭で1本の映画が話題になる、それだけで社会を変える出発点になると信じています。